

美しき清流は太古の森の雫より

第二話：蜆獲りの巻き

チャラ三郎の家から徒歩で10分ほど行った部落の西の端に周囲100mほどの小さな池があった。池の北側に沿ってあぜ道が巡り、南側半周は鬱蒼とした藪に覆われていた。

池底から湧き出す聖水は限りなく透明であり、池の底から伸びる蓮の茎の一本一本が鮮明に映し出されていた。

水面に自生した蓮の葉は春になると白く大きな花をつけ、まるで小さな尾瀬ヶ原のような光景であったが、誰一人として静観することのないくらいに自然に満ち溢れた部落であった。

それどころか、「池には河童が住んでいて、いたずら坊主を沼底に引き込んでしまう」と、ばあちゃんから聴かされていたので「チャラ三郎」は滅多にこの池に来ることはなかった。

「チャラ三郎」はひとつ年上の「寛坊」と、熊野神社の裏山に入って野鳥観察するのが好きだった。メジロ・ホオジロ・鶯・といった野鳥はもとより、最近では見かけなくなった子連れのコジュケを見つけるのは難しいことではなかった



写真は現在の熊野神社裏の小道

川探検へと変わっていったのであった。藪こぎの中を小川に沿って遡ると直ぐに、小川を横切る畔道にでました。その畦道は「チャラ三郎」がいつも川遊びに行くときに近道として通る道だったので

「何だ此処か・・・」

二人は顔を見合わせましたが、そのまま畦道を越えて、更に、茶屋坂も越えて

ある日、「チャラ三郎」はいつもの様に「寛坊」と二人で神社の裏山に出かけました。

その日に限って野鳥が見つからず、いつもより更に山肌を下って行くと、そこには小川が流れていました。

「へえーこんな場所に小川があったとは知らなかった」

「寛坊、何処まで続いているか見に行くべー」二人は野鳥のことよりも、小川を発見したことに夢中になり、いつしか小



小川を遡上しました。すると最後にトンネルに出遭いました。

「あれ、ひょっとして海老澤の池じゃねえか？」

「えー ほんとかよ？・・・、ふーん 海老澤の池から流れてたのか・・・」

海老澤の池から流れ始る小川のトンネル口にてしばし沈黙する二人

「海老澤の池は底なしだって言うけど、どのくねえ深いかな？」

「どれどれ、棒でも差して見るか・・・」

「大したこと事ねえぞ！」

その時でした、チャラ三郎が小川の底に差した棒に何かが当たりました。

「タニシか？・・・違う、貝だぞ！」

「チャラ三郎」は夢中になって小川の底をかき混ぜると、ビー玉ほどの貝が重なり合う様に姿を見せました。

「おい、これ味噌汁に入っているやつに似てねえか？」

「チャラ三郎」は着ていたシャツを両手で摘み上げカンガルーの子袋のようにして100粒程の貝を持ち帰りました。

「お母ちゃん、味噌汁の貝獲って来たぞ」

「あれ、蛸なんか何処で獲った？」

「やっぱり、これ味噌汁に入れる貝か？」「海老澤の池にいっぱいいるぞ！」

それから毎年「チャラ三郎」は海老澤の池の流れ口付近で蛸を獲るようになりました。

蛸は海老澤池の流れ出しから茶屋坂の下流50m程までにいっぱいいたんだ。

蛸の他のも、イモリ、東京サンショウオ、タニシ、蛸もいっぱいいたんだ。

海老澤の池の蛸の味噌汁には地元：近藤醸造のキッコーゴ丸大豆醤油を少々たらずなのが「チャラ三郎」の好みでした。

その海老澤の池も現在では埋め立てられてしまい、畦道は舗装され、鬱蒼とした藪は整地され数件の民家が立っています。

婆ちゃんの言った河童は、池ごと呑み込んでしまったのであった。

美しき清流よ、何処へ！

「秋川チャラ三郎」

次回、やまめ編 ご期待下さい！